氏名：伊藤匠吾

所属：東京大学大学院総合文化研究科

連絡先（メールアドレス）：ito@fechner.c.u-tokyo.ac.jp

作品のタイトル：蛇行錯視

解説：短い間隔で並んでいる斜め線の後ろで円を上下に動かす。実際には真下、真上に移動しているにもかかわらず、左右方向の運動も知覚され円がうねうねと蛇行しているように知覚される錯視である。

斜め線の間隔を広くしても線をまたぐごとに左右方向の運動が知覚される場合があるが、効果は弱くなる。ここから、うねうねした知覚を生じるには円が常に線分と重なっていることが重要であることがわかる。また、速度を上げた時、進行方向に線分と垂直方向の運動だけが知覚されやすくなる。

2015年度錯視コンテスト入賞のサイクロン錯視と同様、黒色線分との対比による円内部の知覚的な輝度のムラがメカニズムとして考えられるが、この錯視は幾つかの点でサイクロン錯視と異なる。

まず、サイクロン錯視では円が線分の後ろにある時には錯視が起こらなくなったが、この蛇行錯視では円が線分の後ろにある時にも起こり、さらに線分の前にある時には、人によっては効果が小さくなる。

さらに、サイクロン錯視では一方向の運動が知覚されたのに対し、蛇行錯視では左右方向の運動が知覚される。これは、移動スピードが遅い時には知覚される円の位置と物理的な位置のずれが断続的に補正されているためと考えられる。